



編集

論語の神髄と渋沢栄一



5月12日成美教育文化会館で、湯島聖堂を中心に活動されている、中斎塾フォーラム 深澤塾長により行われました。私も参加してきました。

市民レポーター
球歩。

日頃、東久留米で論語を学ばれている人、論語の教えに関心を深く持たれている人達など80名を超える大勢の参加がありました。

日本の長い混迷状態に不安や飽き足らない気持ちをお持ちの方が多くいらっしゃることの証なのではと思え



るほどの盛況です、そして熱気と真剣さを感じました。

深澤塾長のお話に先立ち、比田井東久留米市論語の素読の会会長のリードで、論語の唱和が行われました。

「子曰く、学びて時に之を習う。亦よろこばしからずや。朋の遠方より来るあり。亦樂しからずや。人知らずしていきどおらず。亦君子ならずや。」



渋沢栄一は、幕末から大正時代にかけて、第一国立銀行や東京証券所など数多くの実業の設立運営に関わった、日本の資本主義の父といわれていますが、その判断の基準は「論語」にありました。つまり、考え行動する上の、また会社を運営する上での行動基準を「論語」とし、生涯ぶれることはありませんでした。

その論語の要諦は、「仁」と「述」にあります。「仁」とは、思いやり、人をいつくしむことです。「述」は、継承すること、世代をつないでいくことです。



つまり、日々徳を積み上げ、代々これを子供

に孫につないでいくことが大切です。



「三省」今日一日が終わって寝るときに3つの反省を！

1. 朋友と交わりて信ならざりしか
2. 人のために謀りて忠ならざりしか
3. 習わざるを伝えしか

つまり、「不誠実なことはしなかったか、嘘はつかなかったか、知ったかぶりはしなかったか・・・

渋沢栄一は、反省の中で「誰に会ってどんな約束をしたか」を自らに問い続けることを習慣としました。それが渋沢栄一の他類まれな記憶術にもなっていたのです。



論語は、自分の精神年齢におおして、自分の立場や現実に沿って解釈するのでいいのです。

「私が論語を解釈するときは、それを現実の世界に置き換えたらどうなるのか、現実の世界ではどういうふうを考えればよいか、という読み方をいたします」

(写真は、関係者の了解を得て掲載しています)